

中学校におけるこれからのキャリア教育と 大学との連携

～「総合的な学習の時間」(職場体験等)に注目して～

但田 勝義

要約

幼稚園から高等学校まで、明治維新以来の大改訂と言われた学習指導要領の改訂が行われた。その改訂の骨子にある探究的な学習を通して資質・能力を身に付ける構想は、従来の総合的な学習の時間の目標と内容として重要視されてきた項目である。さらに改訂では、資質・能力の三つの柱「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力、人間性等」に沿って総合的な学習の時間において育成すべき資質・能力が整理された。

本稿では、これら改訂の意義と実践的な課題を中学校のキャリア教育の視点から、本学と連携してすすめている稚内市内の中学校の職場体験を例に明らかにする。同時に、学習指導要領改訂で求められている総合的な学習の時間における探究的な学習の在り方と「学び」の場を提供できる機能性から、地域の大学として学校現場の要望に積極的に応える連携の重要性を論じる。

キーワード

資質・能力の三つの柱

探究的な学習

思考力・判断力・表現力

学びに向かう力、人間性

キャリア教育

はじめに

平成 20 年度の学習指導要領改訂において、「自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成する」こと、いわゆる「生きる力」を身に付けるという大きな指針が示された。また、育てようとする資質や能力及び態度について、各学校で明確に設定できるように「学習方法に関すること、自分自身に関すること、他者や社会とのかかわりに関すること」の三つの視点が示された。

各学校では、問題の解決や探究活動に主体的、創造的、協同的に取り組むため、身のまわりの生活から課題を見だし、学習やゲストティーチャーによる講義などいわば地域を学ぶ活動が多くなった。しかし、この学習では探究活動に取り組む上で困難性と限界性（地域の素材と人材の不足、不況に伴う多忙な労働）が生まれ、職場体験やキャリア教育の本来の目的である基礎的、汎用的能力をどんな体験からどのように育成するかが課題となった。そこで、各学校では創意工夫を図り、地域を学ぶ総合的学習の時間から地域で学び、地域で生活する人々とともに学ぶ実践が取り込まれてきた。

平成 29 年度の学習指導要領改訂で「社会に開かれた教育課程」「育成をめざす資質・能力」「主体的・対話的で深い学び」等のキーワードが主張されたのは、これまで積み重ねられてきた総合的な学習の時間の実践例が示した学習過程が、探究のプロセスを明らかにし、生徒の主体的で対話的で深めていく先導的な学びであったからではないかと考える。地域の活性化や人口減少など、地域がもつ課題を見据え、学校教育と高等教育との連携による特色ある教育活動の展開を考えたい。

1. 学習指導要領改訂と中学校の「総合的な学習の時間」

各種国際的な調査結果から、日本の子どもの学力と学習意欲の低下が大きな課題と言われてきていたが、最近の調査では学力については一定の成果が上がってきている。一方、TIMSS の調査結果⁽¹⁾からは、「授業が楽しくない」「授業が将来役に立つとは思わない」という意見を持つ子どもの割合が高く、自己肯定感が低いことが明らかになっている。学力が上がっているにも関わらず、自分で考え、判断して行動する力が弱いことを示しているに他ならない。

これらを背景に、学習指導要領改訂によって総合的な学習の時間の目標が次のように改訂された。

表 1 中学校学習指導要領（総合的な学習の時間）比較対照表

改訂（平成 29 年告示）	現行（平成 20 年告示）
第 4 章 総合的な学習の時間	第 4 章 総合的な学習の時間
第 1 目標 探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。 (1) 探究的な学習の過程において、課題の解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題	第 1 目標 横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成するとともに、学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的・創造的、協同的に取り組む態度を育て、自己の生き方

<p>に関わる概念を形成し、探究的な学習のよさを理解するようにする。</p> <p>(2) 実社会や実生活の中から問いを見だし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができるようにする。</p> <p>(3) 探究的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、積極的に社会に参画しようとする態度を養う。</p>	<p>を考えることができるようにする。</p>
---	-------------------------

こうした目標は、各教科等の学びのつながりと連動を問うものであり、そのカリキュラムの中核になっているのが、改訂のねらいや内容から総合的な学習の時間であると考えられる。それは、学習指導要領総則第2「教育課程の編成」の1の「各学校の教育目標と教育課程の編成」において

教育課程の編成に当たっては、学校教育全体や各教科等における指導を通して育成を目指す資質・能力を踏まえつつ、各学校の教育目標を明確にするとともに、教育課程の編成についての基本的な方針が家庭や地域とも共有されるよう努めるものとする。その際、第4章総合的な学習の時間の第2の1に基づき定められる目標との関連を図るものとする。

と記されていることから、各学校がカリキュラムをデザインする上で、総合的な学習の時間を教育課程編成の起点として位置付ける必要性を示している。

2. 総合的な学習の時間で育成を目指す資質・能力と関係性

前述のとおり、平成20年度学習指導要領改訂では、育成すべき資質・能力及び態度として、三つの視点が例示されていた。この視点はOECDが示した主要能力(キー・コンピテンシー)⁽²⁾とも符合している。各学校では、三つの視点を参考に教育実践を積み重ねてきたが、平成29年度学習指導要領改訂で、育成を目指す資質・能力を検討するに当たって、この三つの視点との関係を整理することが求められている。

三つの柱でいう個別の知識については、各学校が設定する内容や生徒一人一人の探究する課題に応じて異なるが、どのような学習活動を行い、どのような学習課題を設定し、どのような学習対象と関わり、どのような学習事項を学ぶかということと大いに関係する。

一方、個別の知識は探究のプロセスが繰り返され、連続していく中で、何度も活用され発揮されていくことで、構造化・体系化された概念的知識へと高まっていく。探究のプロセスにより、どのような概念的知識が獲得されるかは、何を学習課題にするかにより異なるため、学習指導要領上で設定することは難しいが、各学校が目標や内容を設定するに当たっては、どのような概念的知識が形成されるか、どのように概念的知識を形成していくかが重要である。

表2は、中教審部会で検討された三つの柱に沿った育成すべき資質・能力を整理した素案である。

表2 三つの柱に沿った育成すべき資質・能力の整理

資質・能力の三つの柱に沿った総合的な学習の時間において育成すべき資質・能力の整理（素案）			
	個別の知識や技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力、人間性等
中学校	課題について横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して獲得する知識	探究的な学習を通して身に付ける課題を解決する力 ・課題設定 ・情報収集 ・整理分析	主体的な探究活動の経験を自己の成長と結び付け、次の課題へ積極的に取り組もうとする態度を育てる
	課題について横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して獲得する技能	・まとめ表現 など	協同的な探究活動の経験を社会の形成者としての自覚へとつなげ、積極的に社会参画しようとする態度を育てる

（平成 28 年 3 月 中央教育審議会教育課程部会 資料から）

横断的・総合的な学習や探究的な学習については、課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現が探究のプロセスとなる。このプロセスは実生活の中で必要とされる資質・能力となり、課題設定については「複雑さと精緻さ」、情報の収集については「妥当性や多様性」、整理・分析については「多面性や信頼性」、まとめ・表現については「論理性」を高めることが求められる。（表3）

表3 育成すべき資質・能力の整理（思考力・判断力・表現力等）

総合的な学習の時間において育成すべき資質・能力の整理（思考力・判断力・表現力等）				
	課題の設定	情報の収集	整理・分析	まとめ・表現
中学校	複雑な問題状況の中から適切に課題を設定する	目的に応じて手段を選択し、情報を収集する	複雑な問題状況における事実や関係を把握し、自分の考えを持つ	相手や目的、意図に応じて論理的に表現する
	仮説を立て、検証方法を考え、計画を立案する	必要な情報を収集し、類型化して蓄積する	視点を定めて多様な情報を分析する 課題解決を目指して事実を比較したり、因果関係を推測したりして考える	学習の進め方や仕方を振り返り、学習や生活に生かそうとする

資質・能力の三つの柱に示す総合的な学習の時間で育成すべき「学びに向かう力、人間性等」は、三つの視点の中でも「自分自身に関すること」「他者や社会とのかかわりに関すること」と対応している。自分自身に関することとしては、「主体性や自己理解」「心情や態度」が考えられ、他者や社会とのかかわりに関することとしては、「協同性や他者理解」「社会参画・社会貢献」が考えられる。それ

それぞれにおいて、責任感や自信・積極性、協調性や開放性などの方向性で質が高まるように学年の発達段階や実態によって設定することが必要になる。(表4)

表4 育成すべき資質・能力の整理(学びに向かう力、人間性等)

総合的な学習の時間において育成すべき資質・能力の整理(学びに向かう力、人間性等 案)			
	主体性・協同性	自己理解・他者理解	内面化・社会参画
中学校	課題に誠実に向き合い、課題の解決に向けて探究活動に主体的に取り組もうとする	自分のよさを生かしながら探究活動に向き合い、責任をもって計画に取り組もうとする	探究的な課題解決の経験を自己の成長と結び付けて考えることができ、次の課題へ積極的に取り組もうとする
	互いの特徴を生かすなど、課題の解決に向けて探究活動に協同的に取り組もうとする	異なる意見や他者の考えを受け入れながら探究活動に向き合い、互いを理解しようとする	探究的な課題解決が社会の形成者としての自覚へつながり、積極的に社会活動に参加しようとする

3. 地域の課題(人口減少)と「総合的な学習の時間」

平成29年告示の学習指導要領解説には、「地域や学校の特色に応じた課題とは、町づくり、伝統文化、地域経済、防災など各地域や各学校に固有な諸課題のことである。全ての地域社会には、その地域ならではのよさがあり特色がある。古くからの伝統や慣習が現在まで残されている地域、地域の気候や風土を生かした特産物や工芸品を製造している地域など、様々に存在している。これらの特色に応じた課題は、よりよい郷土の創造に関わって生じる地域ならではの課題であり、生徒が地域における自己の生き方との関わりで考え、よりよい解決に向けて地域社会で行動していくことが望まれている」(3)と説明している。地域格差は、人口減少というどの地域でも抱えている国家的な問題を生み、人口構造に大きな変化と生産年齢人口の大幅減少という深刻な問題となっている。

次に示す図1・図2は、北海道と稚内市の5年ごとの人口の推計を予想したものである

図1 北海道 年齢別推計人口(×千人)

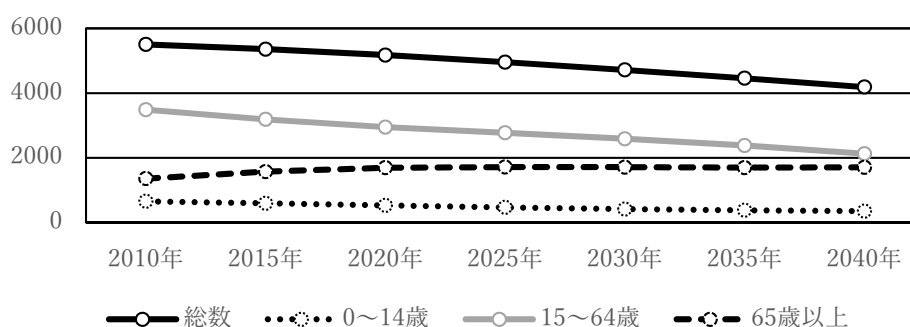
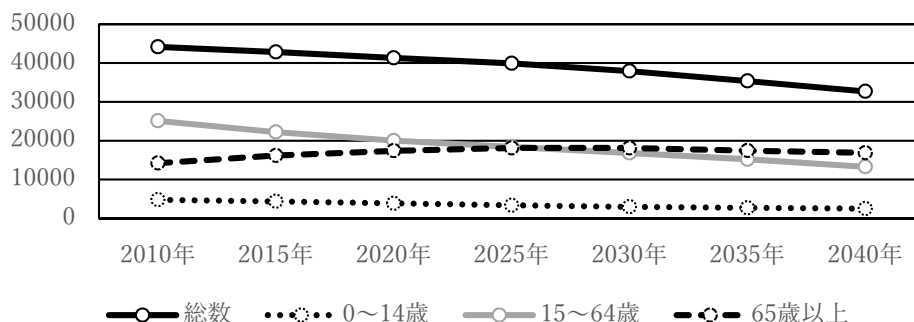


図2 稚内市 年齢別推計人口（人）



国立社会保障・人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口（平成25年3月推計）」から作成

図3 2015年度
稚内市年齢別人口比

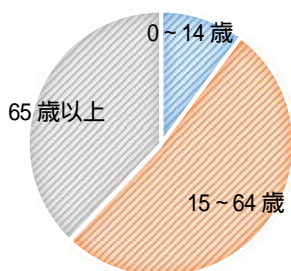
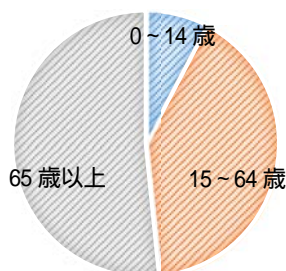


図4 2040年度
稚内市年齢別人口比



国立社会保障・人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口（平成25年3月推計）」から作成

この現実とは、中学生に閉塞感を感じさせるかもしれないが、現実を知らないで将来を夢見るのではなく、将来の地域を真剣に考える生徒を育てる観点から、中学校で取り込まれるキャリア教育の意義は大きい。地方の人口減少の問題は、地域に残りたくても自分が目指す職業がない環境をつくり、生産年齢人口（15～64歳）が減少することはその深刻さに一層拍車をかける。そして、その問題に直面するのも、20年後の地域を創生するのも現在の小学生、中学生である。総合的な学習の時間で取り組まれているキャリア教育に「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基礎となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」というねらいがあるならば、生産年齢人口が減少し限られた職種や事業所の中で職場体験するのはなく、総合的な学習の時間で育成すべき3つの柱の「学びに向かう力、人間性等」にあたる積極的に社会参画する態度を育成することが重要である。

本学が情報メディア学科として、地域の大学として取り組んでいる「ETロボコン」への参加や公開講座、中学3年生を対象とした「まちラボ数学教室」や豊富町、利尻町、猿払村での小学生・中学生への学習支援、市民の皆さんの参加を呼びかけた学園祭やサンタラン、コーヒー・フェスティバルなどのイベント企画など、地域とのつながりや活性化に大学として大きな役割を發揮していることは、地域の将来について夢や希望を拡げる結果を生んでいる。今後は、中学校の総合的な学習の時間との関連をより密接にし、より具体的な連携と取組が、社会に積極的に参画する態度を育成し、学びに向かう力、人間性等をはぐくむ起点になるのではないかと考える。

4. 中学校におけるキャリア教育と大学との関連

中学校におけるキャリア教育の方向性は、「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基礎となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」を目指し、様々な教育活動を通じ、基礎的・汎用的能力を中心に育成することを目標としている。

キャリア

人が生涯の中で様々な役割を果たす過程で、自らの役割の価値や自分と役割との関係を見いだしていく連なりや積み重ね。

基礎的・汎用的能力

人間関係形成・社会形成能力

自己理解・自己管理能力

課題対応能力

キャリアプランニング能力

(平成23年1月 文部科学省 中央教育審議会答申から)

同時に、中央教育審議会答申は発達段階に応じた(中学校における)キャリア教育と大学・短期大学でのキャリア教育のポイントを次のように示している。

発達段階に応じたキャリア教育

中学校～社会における自らの役割や将来の生き方・働き方等を考えさせ、目標を立てて、計画的に取り組む態度を育成し、進路の選択・決定に導く。

大学・短期大学でのキャリア教育推進のポイント

教育課程の内外を通じて社会的・職業的自立に向けた指導等に取り組むための体制整備を踏まえた取組の実施

各大学の機能別分化の下、育成する人材像・能力を明確化した実践的な教育の展開

(平成23年1月 文部科学省 中央教育審議会答申から)

以上のことから、中学生が大学そのものの環境やシステム、特徴を知るといことも含め、専門的な環境の活用、学びに向かう力の育成、高等学校における進路選択や将来の職業選択のための情報収集などで大いに活用すべきと考える。北海道では25の自治体にしか大学・短期大学がない。その優位性とキャリア教育の観点からも相互に連携したアイデアに満ちた活用を考えるべきである。

5. 実践事例 稚内東中学校第2学年 職場体験(キャリア教育)の取組から

稚内市立稚内東中学校は、稚内市の東地区に位置し全校生徒216名、教職員数26名の中規模中学校である。校訓は「融和創造」。「力合わせ」と「安心」が満ちあふれる学校をスローガンに学校づくりをすすめている。平成25年に新校舎が建てられ、稚内東小学校と体育館を共有するなど、小中一貫教育の研究指定校として研究がすすめられている。総合的な学習の時間の目標は、「豊かな心と思いやりの心を育てる『力合わせの時間』として工夫と充実に努める」。主な内容は、仲間と支え合い、高め合って学ぶ合唱活動 ふるさとに学ぶ地域活動 生き方と学び方を学ぶ進路学習 である。

キャリア教育の一環として、第2学年で職場体験の活動が計画されているが、今年度は「大学で何を学んでいるのか」「将来数学の教師になりたいが何のためにどのような勉強をしているのか」「ロボットのプログラミングについて知りたい」などの要望があり、2名の生徒が授業や施設見学、担当者との懇談など一日大学を体験した。具体的なプランは次のとおりである。

資料

平成 29 年度 稚内東中学校第 2 学年 職場体験学習実施計画

1. 目的

- (1) 働く体験を通じて、職場で働くことの喜びや厳しさを学ぶ。
- (2) 働く体験を通じて、自己の能力や適性について理解し、これからの進路選択に役立てる。
- (3) 働いている人々に触れる中で、言葉遣いやマナーなど社会人としての基礎や自覚を身に付ける機会とする。
- (4) 体験した職種の内容を学年で交流し、様々な職種の特徴や違いを学び、将来の自分の職業選択を豊かにする。

2. 日時

平成 29 年 10 月 27 日（金） 8:00～16:00 職場にあわせて訪問・活動する。

3. 内容

市内の会社・事業所・店舗等を訪問、見学を行い事前学習に基づいて質問する。

可能な限り、実際に体験し、各種職業への理解を深める。

体験後に個人で反省、グループごとにまとめを行い、発表・掲示する。

4. スケジュール

9 月 2 2 日（木） 職場体験事前活動 体験先決定、目標・計画書・リーダー決定

9 月 2 8 日（水） 職場体験事前活動 履歴書作成

10 月 予備日

10 月 2 7 日（金） 職場体験学習

10 月 2 8 日（土） 職場体験事後活動 発表物・礼状の作成

11 月 職場体験事後活動 職場体験発表交流会

5. 活動内容

職場の決定 事前アンケートから各事業所と連絡を取り決定する。人数や受け入れ体制によっては希望変更もある。

履歴書作成 将来働くときと同様に履歴書を提出する。なぜその職業を希望するのかなど志望動機を書く。自己アピールも書く。

計画書作成 個人又はグループで、計画や目標、希望する活動などを企画し提出する。

職場体験 仕事の内容だけでなく、挨拶、返事、態度、言動も身に付ける。

発表物作成 グループごとに、体験内容や感じたことなどを壁新聞スタイルでまとめ、発表交流する。

礼状作成 感謝の気持ちを伝えるとともに、感想や感じたこと、成長できたこと、将来役に立てていきたいことなどを伝える。

6. その他

履歴書様式は別紙参照（志望理由をしっかりと記入するように指導する）

職場体験の日程

～ 8:30	学生玄関集合
8:50～10:20	授業体験 「特別活動論」 ・模擬授業体験
10:30～12:00	授業体験 「プログラミング基礎」 ・E Tロボプログラミング体験
12:00～12:50	昼食(学生食堂)
12:50～14:20	事務職員との面談
14:30	帰校

写真1 模擬授業の様子



今回の職場体験の大きな特徴は、数学の教員を志望しているということから事前に2つの課題を提示して、15分程度の模擬授業を体験したことである。課題の内容は、「マッチ棒で正方形をN個作ったときのマッチ棒の数を文字Nを使って表しなさい」という文字の式の応用問題とした。大学2年生が生徒役を演じ、発問や板書、文字を使って表す合理性を説明した。実際に模擬授業形式で授業をする体験がないので、2名の生徒も学生も貴重な体験をすることができ、学びに向かう力の資質・能力の育成という点で大きな成果を得ることができた。

【生徒の感想】～礼状から

A君： 稚内北星学園大学での授業参観、模擬授業、ロボコン体験はとても楽しかったですし、とても良い経験となりました。授業参観では和やかな雰囲気でありながら意見をたくさん言っていて、私たちの学年とは比べものにならず参考になりました。また、模擬授業でも少し緊張していたのですが、良い感想ばかりいただいたので自信になりました。それとロボコン体験でもプログラミングの大変さとやりたい動きができた時の達成感を味わえ、将来そんな達成感からくる喜びを感じながら生活していきたいと思いました。

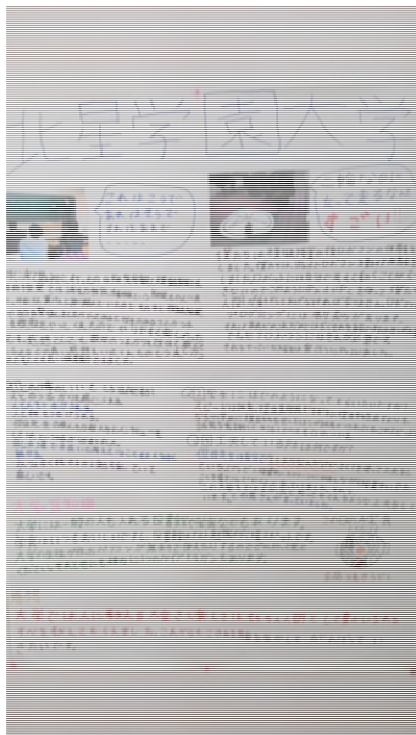
最後になりますが、職場体験の皆様には貴重なお時間をいただき、また何かと失礼なこともあったと思いますが、お許しいただければ幸いです。今回の体験で学んだことを今後の学校生活や進路決定に活かしていきたいと思います。

N君： 僕は大学での実習を通していろいろな事を学びました。それは、大学の先生方はただ勉強を教えているのではなく、きちんと学生と関わったり工夫して授業をしていて、改めて先生の仕事は大変だなと思いました。しかし、大学の先生はとてもやりがいがあり、なりたいという思いが更になりました。

最後になりますが、職場の皆様には貴重なお時間をいただき、また何かと失礼なこともあったことと思いますが、お許しいただければ幸いです。今回の実習で学んだことを今後の学校生活や進路決定に活かしていきたいと思います。今後もしいろいろとお世話いただきこともあるとは思いますが、よろしく願いいたします。

N君は第1学年の時不登校でほとんど学校に来ていない。2年生になって少し前向きになり、今回の職場体験も自分で決め積極的に参加した。

写真2 発表・報告の壁新聞



1 壁新聞の内容

- 模擬授業をやるのは緊張しましたが、学生の皆さんがうまく生徒役をやってくれたのでやりやすく楽しかった。
- 大学生の感想で「数学の系統性を改めて教えてもらったみたいでした」と言ってくれたことが嬉しかった。とても良い体験ができました。
- ETロボコンの話を聞いて、ロボットは人間が動きを考えるので制御することから一つ一つ解決していく発想が大事だと思った。大学生がとても楽しそうにやっていた。
- 食堂や図書館を一般の人でも使えることが初めて知った。講堂には稚内で唯一のパイプオルガンもある。穴場スポットがたくさんある。試験勉強も集中してできるので普段から行ってみようと思った。
- 大学では人に教える大変さと楽しさはもちろん、人間として豊かになれる術を教えてもらいました。この経験を活かしたいと思った。

本学に、市内や近隣町村から大学見学（体験）に来る中学校が数校ある。いずれも施設見学や短時間の授業参観、国際理解教育として外国人の先生の講話などが主な内容である。今回、初めて生徒の要望に応える内容で職場体験を実施した。中学校でも大学でも内容的に初めての取組でもあり、連携不足もあったが、「学びに向かう力、人間性」「思考力・判断力・表現力」の資質・能力を育成する点で大きな成果があった。

このことは担当教諭の感想からも伺うことができる。

【第2学年担任 大西雅人教諭】インタビュー

模擬授業には驚いた。生徒もよくやったなと感じた。小学校訪問のときは、先生の〇付けの手伝いや一緒に遊んだりで授業をすることはない。今回は15分でも模擬授業をやって、自分たちの授業のあり方や教師の大変さがわかったようで貴重な体験だった。ロボコンのプログラミングも今後考えたい。学校現場では十分にできないことなので専門的な大学との連携が効果的だと感じた。

【第2学年担任 平岡雅子教諭】インタビュー

今回の職場体験を経験して生徒が成長してきた。一人は第1学年で不登校だったが、今回の自分の意思で体験して本当に楽しかったみたいだった。現在も頑張って登校しているが、少し自信が付いてきたように見える。生徒の成長と変化が見える。

写真3 稚内中学校3年生の大学訪問



6. 学校現場と大学との連携の展望

新学習指導要領解説の中で、学校外部との連携の構築のねらいと留意点が解説⁽⁴⁾されている。その内容は、生徒一人一人の興味・関心に応じた学習活動を実現させるため、専門スタッフが参画して複雑化・多様化した課題に取り組んだり、時間的・精神的な余裕を確保したりしていくことが重要である。専門的スタッフとして例示されているのは、

- 保護者や地域の人々 ○専門家をはじめとした外部人材
- 小学校や高等学校等の関係者 等

であるが、現実的には本学のように情報メディアに精通している、教職課程がある大学は最適な環境である。このように地域の学習環境を積極的に活用したり、地域の人々とともに活動したりすることで、学校と地域との互恵性が生まれる。

その際留意しなければならないことは、

- 地域活動や学校の活動に積極的に参画して信頼関係が築かれ、相互に協力する体制を築くこと。
- 中学校には校務分掌上の担当者、大学側には事前打ち合わせや学内調整の担当者を設置する必要があること。
- 大学が可能な授業や体験内容、指導者のリストを作成すること。
- 効果的な体験活動を行うため、双方の担当者による事前打ち合わせを行うこと。
- 地域の活性化やキャリア教育の充実を図るため、大学側も報告会に参加すること。
- 取組の様子や成果を双方のメディアを活用して発信すること。

が考えられる。

人口減少に伴い地域の教育素材や人材も減少し、生徒一人一人のキャリア発達に沿った活動ができにくい環境になっている。それら負の要因の中から、自らが社会参画し地域を活性化していく資質・能力を、地域から学ぶ教育体系の中で育成する発想が大切である。そのための学校と大学の連携が、学校を核として地域社会も活性化していく「次世代の学校・地域」を創生していくことにつながると考える。

注

- (1) IEA (国際教育到達度評価学会) が実施した国際数学・理科教育動向調査。平成 28 年 11 月報告。
- (2) OECD (Organisation for Economic Co-operation and Development / 経済協力国際機構) が 2003 年に最終報告。社会・文化的、技術的ツールを相互作用的に活用する能力 多様な社会グループにおける人間関係形成能力 自発的に行動する能力をキー・コンピテンシーとした。
- (3) 平成 29 年 7 月「中学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編」文部科学省。「第 5 章各学校において定める目標及び内容 P29」で解説。
- (4) 平成 29 年 7 月「中学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編」文部科学省。「第 9 章総合的な学習の時間を充実させるための体制づくり 第 5 節外部との連携の構築 P136」で解説。

参考文献

- ・田村 学編著「平成 29 年版 中学校新学習指導要領の展開 総合的な学習編」 明治図書出版 2017 年 11 月
- ・田村 学編著「平成 29 年改訂 中学校教育課程実践講座 総合的な学習の時間」 ぎょうせい 2017 年 12 月
- ・「平成 20 年告示 中学校学習指導要領 総合的な学習の時間編」 文部科学省 2008 年 3 月
- ・「平成 29 年告示 中学校学習指導要領 総合的な学習の時間編」 文部科学省 2017 年 3 月
- ・「中学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編」 文部科学省 2017 年 7 月
- ・「中央教育審議会答申」 文部科学省 2012 年 1 月
- ・「日本の地域別将来推計人口」 国立社会保障・人口問題研究所 2014 年 3 月
- ・平成 29 年度「東中の教育」 稚内市立稚内東中学校 2017 年 4 月

英文タイトル

Career education from now on at junior high school and Collaboration with universities
~ Paying attention to "Comprehensive learning time" (workplace experience etc) ~

英文要約

From kindergarten to senior high school, the revision of the guidelines for teaching which was said to be a major revision since the Meiji Restoration was carried out. The concept to acquire qualities and abilities through exploratory learning in the framework of the revision is an item that has been regarded as a priority and time objective of the conventional comprehensive learning. Furthermore, in the revision, it should be trained in comprehensive learning time according to the three pillars of "qualities and abilities" "knowledge and skills" "thinking ability, judgment ability, expressiveness, etc." "ability to learn, human nature etc." The qualities and abilities were arranged.

In this paper, we will clarify the significance of these revisions and practical issues as an example of the workplace experiences of junior high schools in Wakkanai City in cooperation with our university from the viewpoint of career education at junior high school. At the same time, we actively respond to the demands of the school site as a regional university from the functionality that can provide inquiry learning in the time of comprehensive learning required by the revision of the course of study and "learning" Discuss the importance of collaboration.